

Charlotte Brontë と Charles Dickens の隠された対抗意識

- *Jane Eyre* から *Bleak House* そして *Villette* へ¹

宮川和子

Charles Dickens と *Jane Eyre*

1850 年代初頭は男女同権主義を標的にする言説があふれていた。*Punch* の諷刺漫画はブルーマーをはく女性を嘲笑し、女性が団結して男性並みに地位を向上させようという動きを戯画化し攻撃した。² 一方、1840 年代後期から 1850 年代初期にかけて、女性作家は多くの読者を獲得しつつあり、彼女たちの活躍は、男性作家にとって風刺するための空想物語などではなく、競争心を駆り立てる、気がかりな現実となっていた。英国に住んでいた Nathaniel Hawthorne は、50 年代半ばに“d-d mob of scribbling women”³ と手紙に書き、作家としての自分の地位が女性作家たちに脅かされている、という不安を述べた。こうした時代状況の中、特定の男性作家と女性作家の間に対抗意識が潜在したであろうことは十分考えられる。自分の作品の中で相手の作品を批判し、模倣やずらしなどの操作によって密かに揶揄するということがあったのではないだろうか。Charles Dickens と Charlotte Brontë という二人の作家を取り上げ、二人の間に潜在した対抗意識を探りたい。

当時、ディケンズは *Household Words* の編集者として、Elizabeth Gaskell を始めとする女性作家の才能に敬意を払うべき立場にあった。しかし、慈善事業や社会改革の集会で出会う女性たちにいらだちを感じていたことは、*Bleak House*⁴ の次のような部分を読めばわかる。“Miss Wisk informed us, with great indignation, ... that the idea of woman’s mission lying chiefly in the narrow sphere of Home was an outrageous slander on the part of her Tyrant, Man”(BH 479) というように女権拡張論者である Miss Wisk が戯画化されて描かれている。それは“great indignation”や“an outrageous slander”というように、感情的かつ攻撃的な言葉で彼女の態度やセリフが描写され、彼女への反感を刺激するよう計算されていることから明白だ。さらに Wisk という名前が whisker を連想させる綴りをもっていることから、彼女を男性化した女性

とみなし嘲笑していることがわかる。

このミス・ウィスクを描いている箇所を、*Jane Eyre*⁵からの引用と比較したい。ジェインはソーンフィールド屋敷にガヴァネスとして滞在し、しばらくすると屋上から景色を眺めては、未知の世界にあこがれ、“it is narrow-minded in their more privileged fellow-creature[men] to say that they [women] ought to confine themselves to making puddings and knitting stockings, to playing on the piano and embroidering bags”(JE 109)のように考えていた。ジェインの思考はまじめな情熱であふれているが、ミス・ウィスクの主張と内容が似ているため、二つの引用を並置すると、ジェインの思考が茶化されているように見えてしまう。女性の解放を謳いあげ、当時危険視までされた *JE* をディケンズは読んでいたのだろうか。

Peter Ackroyd の伝記によれば、ディケンズの *JE* についての発言を記録したものが残っているらしい。⁶ “Dickens had not read *Jane Eyre* and said he never would as he disapproved of the whole school.” (Ackroyd 885) しかしながら何人もの批評家が、ディケンズが *JE* を読んでいたはずである、と論じていることに注意したい。

まず、Ellen Moers は“he [Dickens] certainly knew *Jane Eyre*”と断言している。(22) *BH* の物語の半分が“a strong-minded spinster”(22)つまり Esther Summerson の一人称の語りで語られているという形式に注目し、この形式は *JE* に対する競争意識から思いついたのであると論じている。

次に、Susan Shatto はエスタの語りとジェインの語りにおける言葉の上での類似点をいくつか指摘した上で、ディケンズが *JE* を注意深く読んだ証拠であると述べている。(7, 45-46, 47, 225) シャトーが示す類似点の一例を示すため *JE* と *BH* からの引用を検討したい。

To this crib I always took my doll: human beings must love something, and, in the dearth of worthier objects of affection, I contrived to find a pleasure in loving and cherishing a faded graven image, shabby as a miniature scarecrow. It puzzles me now to remember with what absurd sincerity I doated on this little toy; half-fancying it alive and capable of sensation. (*JE* 28) (emphasis added)

My dear old doll! I was such a shy little thing that I seldom dared to open

my lips, and never dared to open my heart, to anybody else. It almost makes me cry to think what a relief it used to be to me, when I came home from school of a day, to run upstairs to my room, and say, ‘O you dear faithful Dolly, I knew you would be expecting me!’ and then to sit down on the floor, leaning on the elbow of her great chair, and tell her all I had noticed since we parted. (BH 62) (emphasis added)

上記の二つの引用を比較すると、ジェインもエスタも人形を人間のように見立て、心を通い合わせる友達のように感じているという内容の共通性にまず気づかされる。さらに、下線部の構文の類似にも注目したい。“to remember...”“to think...”というように“to”に導かれた不定詞を“it”で受け、さらに不定詞の中で回想する際、感嘆の“what”を効果的に使っているなどの類似点が見つかる。こうした共通点から、ディケンズが *JE* を注意深く読み、学び取った可能性が高いと思われる。

さらに、Anny Sadrin はジェインとエスタの置かれている状況が似ていることを指摘している。二人とも「孤児」であり「厳しく無慈悲で愛情のない伯母」に育てられ、ガヴァネスになるための教育を受けるため「寄宿舍学校」へ送られる。(Sadrin 48) その後、恋愛成就の希望はいったんくじかれるが、最終的にはしあわせな結婚生活を送るという結末も同じである。

一方で、二人の性格は正反対といってもよいものであり、ジェインが「強情で反抗的、率直」であるとすれば、エスタは「従順で、我慢強くて内気」である。こうしたヒロインの性格の違いは、シャーロットとディケンズの女性観の違いを示していると言えよう。ディケンズが、*JE* を読んでいない、と言ったのだとすれば、それは *JE* の中にある当時としては過激な女性観に対する反感から出た発言なのではないだろうか。さらに後輩の女性作家から自分が学んだということを認めたくないという競争心もあったのではないかと思われる。

Charlotte Brontë と *Bleak House*

さて、Charlotte Brontë は *BH* を読みどんな反応を示したであろうか。*BH* の第4章までを読んだ直後、友人への手紙にこう書いている。“I liked the Chancery Part,

but when it passes into the autobiographic form, and the young woman who announces that she is not 'bright' begins her history, it seems to me too often weak and twaddling; an amiable nature is caricatured, not faithfully rendered, in Miss Esther Summerson.”⁷

第一人称で書かれたエスタの語りに対しては「気立てのよい性格が戯画的に描かれ、忠実な描写を欠いている」など辛らつなコメントである。こうしたコメントは、とりわけ *BH* 第 3 章に対する反応ではないかと思われる。この章は、“I have a great deal of difficulty in beginning to write my portion of these pages, for I know I am not clever. I always knew that”(*BH* 62) というエスタの書き出しで始まり、冷酷な伯母に育てられたエスタが、その後寄宿舎学校で学び、後見人 Jarndyce の屋敷へ引き取られるまでの経緯が述べられている。こうした状況は、ジェインが Gateshead Hall を出て Lowood school へ行き、その後 Rochester の屋敷で雇われるまでの状況と似ている。一方、ジェインの状況の変化は自分の意思によるが、エスタの場合はジャーディスの計らいによる、という点が違う。つまり *BH* の第 3 章は、*JE* のゲイツヘッド館とローウッド学校の部分を「戯画」化したものとして読むことも可能である。シャーロットはそのことに気づいたのではないだろうか。

その後出版された *Villette*⁸ の中でヒロイン、Lucy のサー・ネームが Snowe であることは興味深い。Snowe は snow という語を含み、冷たい印象を与えているのに対して、*BH* のエスタに与えられたサー・ネーム Summerson は summer という語と、sun と同音の son との合成で作られ、暖かなイメージを与えるものであり、対照的である。ヒロインにこのような名前をつけたことについて、シャーロット自身は “As to the name of the heroine, I can hardly express what subtlety of thought made me decide upon giving her a cold name” としている。⁹ しかし Jean Frantz Blackall が指摘しているように、彼女は実はヒロインの命名について、「ごまかして」いたのかもしれない、ディケンズを意識していたのかもしれないのである。(382-383)

その根拠のひとつとして、ブラックオールはエスタとルーシーにつけられたニックネームの類似性をあげている。(372-374) エスタはジャーディスから “Old Woman” “Little Old Woman” “Cobweb” “Mrs Shipton” “Mother Hubbard” “Dame Durden”

といったニックネームで呼ばれる。

William Axton は、こうしたニックネームがエスタから「アイデンティティ」を奪い、彼女を「ハウスキーパー」の匿名性へ還元するものであると指摘し、さらに、これらがフォークロアや童謡に現れる魔女や滑稽な老婆、未亡人を指している、誰からも愛されないというエスタの恐怖心と関連している、としている。

(159-160)

一方、ルーシーもまた友人の Ginevra からいくつかのニックネームを与えられている。それらは“old Crusty”“old Diogenes”“Mother Wisdom”“Timon”“grandmother”などであり、人間嫌いで風変わりなひとというイメージを与えるものである。自分を“Loverless and inexpectant of love”(VL 119)と考えるルーシーが自己に対して抱く否定的なイメージを反映している。このようにルーシーもエスタもアウトサイダー的なニックネームで呼ばれ、それらが二人の中に潜む性格をも暗示するものになっていることは、単なる偶然の一致とは思えない。

このように、ブラックオールがエスタとルーシーのニックネームの類似性や名前のコントラストを指摘し、BHのVLに対する影響を論じているのは興味深い、JEをも考慮に入れるべきではなかつたらうか。ジェインもまた、“you elf!”(JE 245)“provoking puppet” “malicious elf” “sprite” “changeling”(JE 274)のようにロチェスターから呼ばれ、いたずらものの風変わりな妖精というイメージを与えられている。こうしたニックネームをヒントとして、ディケンズがエスタのニックネームを作り出したという可能性はある。それならば、ルーシーとエスタのニックネームの類似の背後には、ディケンズがJEから示唆を得て思いついた着想を、シャーロットがさらに発展させた、という相互関係を読み取ることもできる。

ただし、エスタとルーシーのニックネームが似ているとはいえ、ニックネームを与える側の人物の重みが違うことにも注意したい。エスタのニックネームはジャーナディスから与えられているため、権威や拘束力をもっている。一方、ルーシーにニックネームを与える人物は浅薄なジネヴラであり、ルーシーがニックネームの拘束力から解放される余地ははるかに大きい。ここでも先行作品の部分的

な模倣とずらしが見られ、シャーロットのディケンズへの対抗心が潜在していると思われる。

Vashti vs. Esther

3つの作品がすべて旧約聖書 Esther 記と関連があることは注目に値する。エステル記には Vashti と Esther¹⁰ という二人の王妃がでてくる。ワシュティは宴席に姿を現し、その美しさを見せるよう王に命じられるが拒絶する。このため王の怒りを買ってワシュティは追放され、代わりにエステルが王妃の座を占める。シャーロットの創造したヒロインが反逆の王妃ワシュティに似ており、ディケンズのヒロインがエステルに近いということを論じ、両作家の女性観の違いや対抗意識を考察したい。

まず *JE* では、ジェインがソーンフィールド屋敷にガヴァネスとして雇われ、その屋敷の主人口チェスターから、ある日お茶の席にやってきて話し相手をするように命じられる。このとき口チェスターは次のようにジェインに言う。“I know what my aim is, what my motives are; and at this moment I pass a law, unalterable as that of the Medes and Persians, that both are right.”(*JE* 137)

このセリフは、エステル記第1章19節と関係がある。

Therefore, if it pleases the king, let him a royal decree and let it be written in the laws of Persia and Media, which cannot be replaced, that Vashti is never again to enter the presence of King Xerxes. Also let the king give her royal position to someone else who is better than she. (Esther 1:19)

上記の二つの引用を比べると、王の命令に背いて追放されたワシュティとは口チェスターの妻である Bertha に対応し、ワシュティに替わって新たに王妃になる女性とはジェインに対応しているようだ。少なくとも口チェスターの頭の中にはそういう考えがあったことが暗示されている。しかしジェインは、口チェスターの話の聞き“*That sounds a dangerous maxim, sir; because one can see at once that it is*

liable to abuse”(JE 137)と言って彼を諷めている。このときジェインは自分で気づかないうちに、ロチェスターが犯そうとしている重婚の罪を非難してもいるのである。

その後、ロチェスターとの結婚式を挙げようとするまさにその時、ロチェスターにバーサという妻がいることをジェインは知る。この発覚によって、ジェインとロチェスターの関係が、実は対等なものではなかったということがはっきりし、ジェインはソーンフィールド屋敷から逃げ出す。こうしたジェインの行動から、ジェインはエステルよりも反逆者ワシュティに近いことがわかる。

次にBHとエステル記との関連を考察したい。ヒロインの名前がエスタであることが、王妃エステルの役割や性格を受け継いでいることを象徴している。とりわけエスタと後見人ジャーディスの関係が、エステルと後見人モルデカイとの関係と対応していることは注意を引く。王妃エステルの成功は、モルデカイの助言に従い行動したことによるが、エスタもまたジャーディスと協力しながら、制度悪の犠牲者たちを救おうとする。このように、王妃エステルの性格と役割をエスタに与えることで、反逆的なワシュティの要素をもつジェインとの違いが際立つものとなっている。

それでは、VLではエステル記に反応している箇所があるだろうか。第23章に「ワシュティ」という章が設けられていることは、注目に値する。“the shadow of a royal Vashti”(VL 257)と表現される舞台女優について次のような描写がなされている。

Suffering had struck that stage empress; and she stood before her audience neither yielding to, nor enduring, nor in finite measure, resenting it: she stood locked in struggle, rigid in resistance. (VL 258)

ここでは、「ワシュティ」が邪悪であるが力強く、魅力的な反逆者として描かれている。この「闘争」し「抵抗」する姿とはシャーロットの作り出したヒロインたちの姿でもある。BHのエスタには決してないであろう、反逆するものの苦悩を芸術にまで昇華させ、“Death”(VL 258)と同じくらい純粋なものとして謳いあげてい

る。

このように、シャーロットとディケンズの女性観の違いは、聖書に対する反応の仕方についても大きな違いとなって現れている。両作家がエステル記についての全く異なる解釈を示していることで、互いの先行作品へ挑んでいるのだとも考えられよう。

Jane の饒舌、Esther の沈黙/饒舌、Lucy の沈黙

次に、3人のヒロインの語りの特徴を比較して互いの類似点と相違点を探り、作品間のつながりを考察する。まずジェインは、自分の心理について語るとき、率直であり感情を素直に表現している。ソーンフィールド屋敷でパーティが開かれ、Miss Ingram とロチェスターの仲睦まじい様子を目のあたりにする時でも、ジェインは“I have told you reader, that I had learnt to love Mr. Rochester: I could not unlove him now, merely because I found that he had ceased to notice me”(JE 185)のように、あふれんばかりの恋愛感情を語っている。

こうしたジェインの語りを次のエスタの語りと比較したい。

I have omitted to mention in its place, that there was some one else at the family dinner party. It was not a lady. It was a gentleman. It was a gentleman of a dark complexion – a young surgeon. (BH 233)

“some one else”とはエスタが好きになり最後に結婚する Woodcourt であり、名前も明かされていない。先ほどの率直なジェインの語りとは対照的に、エスタの内気な面を強調するための演出であろうか。しかしながら、“I have omitted to mention...”と告げることによって、実はウッドコートのこと気がななかつた、と告白しているようなものだ。これは「沈黙」というよりも、黙っていたということわざをわざわざ話す「饒舌」な語りであるとも言えよう。

さて、VLのルーシーの語りも沈黙の多いことに気づかされるが、エスタの沈黙とは異なることを論じたい。若い医師 Doctor John がルーシーのゴッドマザー、Mrs.

Bretton の息子 Graham であることをルーシーは何ヶ月も黙っている。黙っていた理由についてルーシーは次のように説明している。

“To say anything on the subject, to *hint* at my discovery, had not suited my habits of thought, or assimilated with my system of feeling. On the contrary, I had preferred to keep the matter to myself.”(VL 175)

発見した事実を胸に秘めておく方が気に入っていたというルーシーの説明は、彼女の沈黙が周囲の理解を拒絶する類のものであることを暗示している。Gilbert と Guber は「独房監禁の状態に置かれ内的な混乱や狂気を経験したことのあるものは黙っているほうが賢いとルーシーが考えている」から(419)という説明を与えている。さらにエスタのウッドコートに対する気持ちに比べて、ルーシーのドクター・ジョンへの気持ちは「はるかに曖昧」(Tambling, 141)であり、複雑な感情を簡単に言語化することなどできない、という主張も窺えよう。

このように、3人のヒロインの語り方は、ジェインの「率直さ」とエスタの「内気さ」のように全く対照的と思われる場合もあれば、エスタとルーシーの「沈黙」のように共通点があってもその動機が異なっている場合もある。さらに別の例も検討したい。

ロチェスターとともに果樹園の小道を散歩しているとき、彼はジェインに花を渡す。

“Jane, will you have a flower?”

He gathered a half-blown rose, the first on the bush, and offered it to me.

“Thank you, sir.”(JE 216)

この箇所を、次の BH 第 17 章からの引用と比較したい。ウッドコートが旅立つ前にエスタに花束を残していくが、それは次のような形で述べられている。

At last, when she [Caddy] was going, she took me [Esther] into my room, and put them [the flowers] in my dress.

‘For me?’ said I, surprised.

‘For you,’ said Caddy, with a kiss. ‘They were left behind by Somebody.’(BH 294)

花束を置き忘れたひとの名前は明かされず、キャディの口を借りて“Somebody”と表現されているだけである。この引用の直後、キャディの説明から“Somebody”とは旅に発った医師、ウッドコートであるとほのめかされる。ウッドコートからの花束をドライフラワーにして大切に保管していたとエスタが告白するのは第36章になってからである。エスタにとって「隠すこととごまかすこと」は、「女らしくない」と考えられる行為・思考・感情を巧みに隠蔽するための戦略でもあろう。(Graver, 3) エスタが感情を隠すことで「慎ましい女性」を演じようしている点は、自分の感情を素直に表現しているジェインとは対照的である。

さて、ルーシーの場合はどうであろうか。第13章からの次の引用では、ルーシーも白すみれの花束の贈り主の正体を明かしていない。

...a certain little bunch of white violets that had once been silently presented to me [Lucy] by a stranger (a stranger to me, for we had never exchanged words), and which I had dried and kept for its sweet perfume between the folds of my best dress, lay there unstirred;...(VL 119)

名前を明かさず“a stranger”と述べている理由を、“we had never exchanged words”と説明している。これは、エスタが恥じらいを装ってわざとウッドコートの名前を隠しているのとは違う。しかし、第31章になるまで贈り主が Paul であることを黙っているのは不自然であろう。ドクター・ジョンへの執着心を断ち切る以前、ルーシーがポールに抱いていた感情の性質を知る鍵になりそうな箇所であるが、ルーシーはこの点を明確にしていない。

このように、3人のヒロインの語りは独自の個性と魅力をもっているが、各々が互いに独立して存在しているのではない。先行作品の語りの特徴の模倣とずらしという操作が垣間見え、「同化と批判の混合」(Gilman, 52)となっており、両作家の間に潜んでいた対抗意識が窺える。

2人の Mistresses と 1人の Directrice

JE では最後にジェインはロチェスターの元へ戻り、“I am my own mistress”(JE 435)と言って自分の思い通りの生き方ができると宣言する。一方、*BH* の最終章ではエスタが“the mistress of Bleak House”(BH 932)すなわち「荒涼館の主婦」となると語られる。このように“mistress”という言葉の使い方にも、ヒロインの生き方の違いが表れているようだ。ジェインは自分の自由意志を最も尊重し、エスタは「家庭の天使」の具現となり物語は締めくくられている。

ディケンズは流行作家としても雑誌の編集者としても、ベストセラー小説がいかに多くの読者に影響を与え、社会を変革する力を持ち得るかを知っていたはずである。*JE* の大成功によって多くの女性読者の意識が変わり「解放」や「独立」に目覚めることに、彼が不安を抱いたということは推測できる。事実 1850 年以降、社会における女性の地位を改善するための運動が組織化され始めた。¹¹ その中には、ガヴァネスの地位を向上させるという動きもあった。エスタはガヴァネスになるための教育を受けながら、一度もガヴァネスとして生活の資をかせぐということがなかったのも、大きな意味があるように思われる。

一方、ルーシーは“Directrice”(VL 486)つまり女学校の校長として経済的な独立を果たすが、彼女を見守り学校経営を手助けしたポールの生死は曖昧にされたまま物語は幕を閉じる。¹² ルーシーにとってポールは愛情深い庇護者であると同時に、彼女の独立を脅かす存在でもある。VL の曖昧な終わり方は、ルーシーのポールに対する矛盾した感情とも関連するのだろう。ヴィクトリア朝中期、男性と共存しながら女性が自立することの難しさをも物語っている。

註

本稿は、日本ブロンテ協会 2004 年度大会（甲南女子大学、10 月 16 日）における発表原稿に加筆、修正したものである。

¹ *Jane Eyre, Bleak House, Villette* の出版時期については下記の略年表を参照のこと。

1847年	<i>Jane Eyre</i> 出版される。
1852年2月	<i>Bleak House</i> 第4章まで出版される。
8月	<i>Villette</i> 執筆が軌道に乗り始める。 <i>Bleak House</i> 第19章まで出版される。
1852年11月	<i>Villette</i> の執筆完成。 <i>Bleak House</i> 第29章まで出版される。
1853年1月	<i>Villette</i> 出版される。 <i>Bleak House</i> 第39章以降が執筆されようとする。

² たとえば *Punch*, xxi (1851), 189. ブルーマーをはいた女性が夫にピアノの練習を勧めている挿絵によって、男女の役割の逆転が戯画化されている。ブルーマーをめぐる『パンチ』の反応については、富山太佳夫『ポパイの影に』41-75頁を参照。

³ 1855年に William D. Ticknor に宛てた手紙の中の言葉。Fred L. Pattee, *The Feminine Fifties* 110 から引用。

⁴ 以下本論において *BH* と簡略し、このテキストからの引用は *BH* の記号とともにページ数を示す。

⁵ 以下本論において *JE* と簡略し、このテキストからの引用は *JE* の記号とともにページ数を示す。

⁶ アクロイドによれば、ディケンズの邸宅であるギャズヒル・プレイス (Gad's Hill Place) で、1858年にディケンズが発言し、その直後だれかが記憶からメモしたものが残っているらしい。

⁷ Letter to George Smith, 11 Mar. 1852, in *The Brontës: Their Lives, Friendships and Correspondence in Four Volumes*, The Shakespeare Head Bronte, □, 322. 以下、本書からの引用は *SHB* と記す。

⁸ 以下本論において *VL* と簡略し、このテキストからの引用は *VL* の記号とともにページ数を示す。

⁹ Letter to W.S. Williams, 6 Nov. 1852, *SHB*, □, 18.

¹⁰ 混乱を避けるため、*BH* の Esther はエスタと表記し、聖書 Esther 記の Esther はエステルと表記する。

¹¹ 1850年から1870年の間になされた女性の地位改善の試みは、数の上でも重要さの点でも急速に伸びた。詳しくは、バンクス夫妻『ヴィクトリア時代の女性たち—フェミニズムと家族計画』40-57頁を参照。

¹² 玉井暉氏は、*VL* の二重の結末が結婚と死という二つの可能性を同時に孕んでいるがゆえに、テキストに「多義的なダイナミズム」を与えていることを論じている。『ブロンテ姉妹を学ぶ人のために』211-228を参照。

引用文献

Ackroyd, Peter. *Dickens* (London: A Minerva Paperback, 1991)

Axton, William. "Esther's Nicknames: A Study in Relevance," *Dickensian* 62 (1966): 158-163.

Blackall, Jean Frantz. "A Suggestive Book for Charlotte Bronte?," *Journal of English and Germanic Philology*, 76 (1977), 363-383.

Brontë, Charlotte. *Jane Eyre* (Oxford: Oxford University Press, 2000)

— . *Villette* (Oxford: Oxford University Press, 1984)

The Brontës: Their Lives, Friendships and Correspondence in Four Volumes, The Shakespeare Head Brontë, ed. Thomas James Wise and John Alexander Symington (Oxford: Shakespeare Head Press, 1932)

Dickens, Charles. *Bleak House* (Harmondsworth: Penguin Books, 1971)

Gilbert, Sandra, and Guber, Susan. *The Madwoman in the Attic: The Woman Writer and the Nineteenth-Century Literary Imagination* (New Haven: Yale University Press, 1979)

Gilman, L Sander. *Nietzschean Parody: An Introduction to Reading Nietzsche* (Aurora: The Davies Group Publishers, 2001)

Graver, Suzanne. "Writing in a 'Womanly' Way and the Double Vision of *Bleak House*," *Dickens Quarterly*, 4 (1987), 1-15.

Moers, Ellen. "Bleak House: The Agitating Women," *The Dickensian* (1973): 13-24.

Pattee, Fred L. *The Feminine Fifties* (New York: Appleton-Century Co., 1940)

Sadrin, Anny. "Charlotte Dickens: The Female Narrative of *Bleak House*," *Dickens Quarterly* (Louisville, Ken)9:2, June 1992, 47-57.

Shatto, Susan. *The Companion to Bleak House* (London: Unwin Hyman, 1988)

Tambling, Jeremy. *Confession: Sexuality, Sin, the Subject* (Manchester: Manchester University Press, 1990)

The Learning Bible (New York: American Bible Society, 2003)

富山太佳夫 『ポパイの影に』 東京：みすず書房、1996

中岡洋・内田能嗣編 『ブロンテ姉妹を学ぶ人のために』 京都：世界思想社、2005

バンクス夫妻(河村貞枝訳) 『ヴィクトリア時代の女性たち—フェミニズムと家族計画』 東京：創文社、2002

出典：『神戸英米論叢』 19号 (2005年9月) pp.1-14.

英文レジュメ

The Hidden Rivalry between Charlotte Brontë and Charles Dickens:

Jane Eyre, Bleak House and Villette

Kazuko MIYAGAWA

This paper examines the rivalry between Charlotte Brontë and Charles Dickens hidden in the three texts *Jane Eyre*, *Bleak House*, and *Villette*. Section 1 discusses Dickens' reaction to *Jane Eyre*. According to Peter Ackroyd, a memoir of Dickens' conversations has survived which reads "Dickens had not read *Jane Eyre* and said he never would." However, some critics claim that Dickens must have read *Jane Eyre*. They point out similarities such as the form of the novel – the first-person narration by a young woman, and also the similar situation of the two heroines. In addition, there are a number of significant verbal parallels between passages in Esther's narrative and Jane's. This evidence shows that Dickens must have read *Jane Eyre* with great care. Therefore, it could be said that because Dickens didn't want to admit that he had learned from *Jane Eyre*, he denied having read it in a spirit of rivalry with Brontë.

Did Brontë foster a rivalry against Dickens? Section 2 deals with Brontë's reaction to *Bleak House*. Brontë caustically commented that "an amiable nature is caricatured, not faithfully rendered, in Miss Esther Summerson." Just after this comment, *Villette* was published, in which the heroine, Lucy Snowe, wears a cold image and gives contrast to Esther's surname, Summerson. This implies that Brontë was conscious of Dickens.

Rivalry between the two novelists is found in their own texts. It is notable that the three texts are related to Esther in the Old Testament. Section 3 explores the relationship between the biblical Esther and the three heroines, Jane, Esther, and Lucy. In the Old Testament, Vashti refuses to play the obedient wife, and King Ahasuerus determines to take a new Queen, Esther. Dickens' naming his heroine Esther suggests that her character is partly based on the biblical Esther. On the other hand, the rebellious nature

of Vashti reminds us of one of Brontë's heroines. Thus Brontë and Dickens offer opposed interpretations of the Bible.

Section 4 studies the way the three heroines narrate their story and examines the differences and similarities among them. Jane tends to narrate openly what is happening in her mind and confesses her strong emotions toward Rochester. Esther, on the other hand, tries to hide her feeling. For example, Esther sometimes omits any mention of Woodcourt's name or rather confesses to having omitted it. When Woodcourt left flowers for Esther, he is described as "Somebody." This "priggishness" seems to have the effect of criticizing Jane's "unfeminine boldness." Like Esther, Lucy also sometimes deliberately omits giving information. For instance, Lucy conceals the name of someone who presented a bunch of white violets. However, Lucy seems to reject the other's understanding by her silence, while Esther tries to attract sympathy with her reticence. Thus, in Lucy's narration, we find imitation and alteration from Esther's narration. Brontë seems to parody Esther's narration in a spirit of rivalry.

In the Conclusion, I pay attention to the way the word "mistress" is used. When Jane sees Rochester at Ferndean she declares, "I am my own mistress" meaning "I am independent." Ester, on the other hand, becomes "the mistress of Bleak House," the living embodiment of "an angel in the house." This contrast between Jane and Esther shows that the two novelists held opposite views on "the woman question." However, Brontë must have known the difficulties that faced independent women in the Victorian period. The difficulties are implied in the ending of *Villette*, in which Paul's fate is not narrated clearly. Brontë seems to say that women's independence is incompatible with a life shared with men.